

---

# ご主人様と猫。

鍵屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「主人様と猫。」

### 【NNコード】

N5269S

### 【作者名】

鍵屋

### 【あらすじ】

この度アタシは、諸事情から俺様で変態な「主人様の飼いネコ」になりました。ひつじよおに、不本意ですが。

# 1、お持ち帰つされました。

「若様、それは？」

寝床を求めてふらついていたところを捕獲され、誘拐よろしく連行された先は豪邸でした。

そして出迎えたのは、一ミリの隙もなくきつちつとスーツを着込んだ銀縁眼鏡のどこか冷たい雰囲気のおにーさん。

「拾つたんだ。飼つつもりだからそのつもりで」

そのおにーさんに「若様」と呼ばれた、えっと、「……」主人様は、平然と言い切つてアタシを抱き上げたままその脇を通り抜けた。

「若様、『冗談が過ぎます！』

「冗談じゃないよ、乾。

みーは俺のペット、この俺に爪を立てる生意気なネコだ。それ以上でもそれ以下でもない。お前が心配するようなことじゃない」「ですが！」

おにーさんは納得がいかない様子で怒鳴り、アタシを持っているとは思えない身軽さで歩ぐ……だああ、もう！ この人、を追いかけた。

そのお怒りはごもつともだとアタシも思うですよ。アタシとしましても、この人に捕獲されたのはひつじょおに不本意なですから。逃げようにも、しつかと抱き上げられたのでは抵抗らしい抵抗も出来ないので。

捕まる前にはちゃんと、爪を立て、歯を剥いて抵抗したのです！

ですがその甲斐なくあつさりと捕獲。

大人しく飼われたなら三食寝床付き、という甘言に惑わされた訳じゃないはずです。

ええ、アタシにもプライドというものがあるのです！

世間の荒波にもまれて、爪の垢ほどに削れてしましましたけども。

ともかくっ！

コレにはふかあーいふかあーい、恐ろしく深い事情があるのです！

## 2、家を失いました。（前書き）

住宅火災の描写があります。生々しい描写ではありませんが、  
ご注意ください。

## 2、家を失いました。

それは今日の昼間のことです。アタシが住処であるアパートに向かつて歩いていると、サイレンと鐘を鳴らしながら走つていく消防車に追い抜かれたのです。

火事なのでしょうか、不用心ですね。

この時のアタシはそんなことをちりりと考えただけで、思い切り他人事。

だつて仕方がないのです。

この時のアタシの頭の中は明日からの予定でいっぱいで、実を言えば少々寝不足気味。昨日からビヨビヨをわくわくで、あまりよく寝れなかつたのです。

アパートに近付くにつれて、その浮ついた心に何やら暗雲が漂い始めたのです。

何かが燃えた焦げた臭いに、道路に出て不安そぞろに言葉を交わす奥さま方。

それらはアタシの住むアパートに近付くつれて、どんどん強く、多くなつて行きました。

いやあな予感がしたのですよ。

「お嬢ちゃん、この先のアパートで火事があつてね。悪いけど通行止めなんだよ

アパートまであと少し。

「どうか、アパートの目の前というところで、消防団という文字の入ったヘルメットをしたおじさんに止められました。

アパートで火事。

その言葉でアタシの顔は血の気が引いて真っ青なっていることでしょう。

この先にあるアパートといえば、アタシが暮らすぼろアパートだけ。そこにはアタシの全財産があるのです。

幸いにも、携帯電話とお財布は鞄の中あります。でもそれだけしかないとも言えるのです。

「もしかしてお嬢ちゃん、あのアパートの住人かい？」

力なく頷くと、おじさんは通してくれました。ほぼ鎮火したけどまだ煙が出ているから気をつけていくんだよと、そう言ってくれた消防団のおじさんにお礼を言ってアパートに近付きます。

……ああ、やっぱアタシの住むアパートです。

どの程度の火事なのでしょう。火元はどこなのでしょう。

逸る気持ちを抑えながら、取り出したハンカチで口を鼻を押さえ進みます。

「あんた、なんて事してくれたんだいっ！」

待ち構えていたのでしょう。

アパートの前で警察と消防の方と話していた鬼ババ……もとい、大家さんがアタシを見つけるなりそう声高に怒鳴りました。

「いつかはやると思つてんだよー。」

「この鬼ババ……もとい、いえ、もう訂正するもの面倒です。仕事の都合で保護者が殆ど家に戻つてこないせいなのか、アタシを田の仇にしてるのです。

品行方正を絵に描いたようなアタシだといつて、近所の奥さま方にはすこぶる評判なアタシを、とにかく追い出す口実が欲しいのです。

曰く、保護者がいないのをいいことに男を連れ込んでいる。

曰く、夜遅くまで帰つてこないのは援助交際をしているからだ。

曰く、曰く、曰く……。

とまあ、こんな具合に。

もちろん男の人が苦手で田もまともに見れない彼氏なし歴年齢なアタシにそんなことは無理ですし、遅くまでアパートに帰らないのはこの鬼ババと顔をあわせたくないのと節約のために図書館で勉強してるからで。

近所の奥さま方は少なくともアタシがそんな子でないことはわかつてくださつてるようで、表面的には優しく接してくださつてます。

「ちょっと落ち着いてください。

火元がその子の部屋だというだけで、原因もなにもわかつてないんですから」

鼻息荒く怒鳴り散らす大家さんを警察の方が宥めながら、アタシから引き離します。

同情するような憐れむような、そんな視線がアタシに向けられますが、その奥には疑うような色が見えました。

アタシは「いつこのに敏いのですよ。

「あー、落ち着いて聞いてくれるかな。

火元は君の部屋で、台所周りというか玄関近くの燃え方が酷いか  
らその辺りが火元じゃないかと思つ。詳しいことは完全に鎮火を確  
認してからになるけど」

「玄関ですか。燃えそうなものをおいた記憶はないのですが?  
ですが消防の方がそういうなら、そつなのでしょう。

「発見が早かつたから居室の方は燃えてないけど、煙と消化の水で  
酷い状態になつてゐる。玄関扉が熱で変形もしてゐし、とても住める  
状態じやない。

それから現場検証を終えるまでは物を動かさないでもらいたいん  
だ」

それってつまり、

「申し訳ないんだけどね」

「おやうことなのですね。

神様、これは浮ついていたアタシへの罰なのですか！？

久しぶりに叔母さんに会えるので、ちょっとつきつきわくわくし  
てただけじゃないですか！

「それって、いつまでかかるんですか」

なんとか絞り出した質問に返つてきたのは、早くても明日の晩過  
ぎだという答えだったのです。

## 2、家を失いました。 （後書き）

住宅火災についての対応は、よくわからないので想像で書いてあります。

消防や警察関係の方で「違う!」といつ方は……目をつぶっていた  
だくか、情報提供をお願いします。

### 3、野良になりました。

ふらふらと、アタシは歩いた道を逆に走っていたのです。  
家に帰る時は軽い足取りだったというのに。  
この差はなんなのでしょうか。

……え、わかつてゐのです。  
火事と鬼ババのせいなのです。

鞄から取り出した携帯電話をぐつと握り、叔母さんからの連絡を待つのです。

アタシの保護者である叔母さんは、世界を飛び回る謎のスーパー  
ウーマンなのです。

……聞いた仕事内容がアタシにはさっぱりだつただけで、横文字  
が社名などこかの国に本社を置く会社の〇〇さんなのですが。

とにかく、その叔母さんがアタシの夏休みの始まりと同時期に長  
期休暇をもぎ取つてくださりまして、一緒に旅行に行こうかといふ  
ことになつてゐたのです。

今日の夕方にアタシを叔母さんが迎えに来て、空港近くのホテル  
で一泊。そして遙か南の国に飛び立つ予定だったのです！

うーうーうー。

いくらでも涙が出せそうな気がしますが、そこは必死に我慢です。  
女には泣いても良い時と悪い時があるので、叔母さんがアルコ  
ールが入ると熱心に語ってくれるのです。

女の涙は武器なのだと。

それを男がいない場所で流すなんて、無駄だと。

アタシが我慢してるのはソレが理由じゃあつませんよ、念のため。

携帯を開き時間を確認すると、なかなか叔母さんの乗る飛行機が日本につく時間です。

ついたら一番に連絡をくれると、この間の電話で言つてましたです。

そわそわと、電話を待ちます。

胡散臭さ満載なのは、氣付かなことにしておきましょう。それがアタシのためです。

じ、じりりり。じりりり。

昔懐かし黒電話の音で携帯が鳴つて、慌てて電話を開きます。

ディスプレイに表示されるのは叔母さんの名前。

嗚呼、天にも舞い上がる嬉しさですよ。

「　お」

『急な仕事が入っちゃつた』

窮状を涙ながらに訴え、迎えに来てと告げる前に……叔母さんは今にも泣きそうな鬱々とした声音でアタシの言葉を遮つたのです。

『これから愛しい姪と久しぶりのバカنسだつて言つのに、アタシじゃないと無理だとかあの無能上司が言いやがるの。絶対にアタシに対する嫌がらせだとと思うんだけど、クライアントがアタシじゃないと嫌だってアタシの携帯にまで電話かけて来たのよ。それも無能の嫌がらせなんじゃないかとも思うんだけど、あの無能じゃ話にならぬのは事実なの』

息も吐く間もないという言葉を体現したかのようだ、そんな調子な叔母さんに……アタシは言おうとした言葉を飲み込んだのですよ。『じつくん、と。間違つても口から飛び出さないように、しつかど。

『でね、折り返す飛行機に乗つて戻らなきやならなくなつたの。一時間でも一時間でも時間が取れたなら、直に会つて話すだけでもしたかったのに。

それで……びづっ、元氣にやつてる？ 問題はない？』

「うん。元氣。

大丈夫、やつてきてるよ」

頬を伝つのは、汗ですとも。今日は暑いですからね。間違つても涙なんてものじやないのです。

「いつものように成績表は国際便で送るから。夏休みが終わるまでには送り返してね」

『何か問題があつたら言つてよね。

仕事よりも貴女のほうが大切なんだから』

電話回しのから聞こえた呼び出しのアナウンスに叔母さんは悪態をつくと、『めんねと小さく謝つて、それから電話を切りましたです。

泣いてなるものですか！

今は泣いちやダメな時なのです。

叔母さんの仕事の邪魔にはならないと、叔母さんの厄介になると決まった時に誓つたのです！

頬に流れる？汗？を拭つて、顔を上げます。  
視界が歪んで見えるのもきっと、暑さのせいなのです。

「とつあえず、寝床を見つけなきや」

決意を胸にアタシは咳いて、歩き出したのです。明るい未来にー。  
自分で言つてなきや、せつてられないですよ。ぐすん。

#### 4、寝床を決めました。

夏休みには叔母さんと海外旅行に行くのだと、親しい友人たちには話してあつたですよ。

遊び予定を立てる都合がありましたからね。なので友達の家に泊めてとお願いするわけにはいかないのです。気を使わせるし、何より迷惑をかけることになっちゃいますからね。

そんな訳でアタシが今夜の宿に決めたのは、学校なのです。

運動部のために立派なシャワールームがあるのは、一般生徒なアタシでも知る有名なこと。

それに幸いにも今は初夏。暖房がなければ凍えてしまつたとは違うのです。

こつそり黙つて一泊するくらい、出来るに違いないのです。

戻ってきた学校は、部活の掛け声で賑やかでしたです。こつそりシャワーを借りるにもまだ時間が早いですし、する「こと」が正直ありません。

じつとしてると悪らないことばかり考えてしまいました。

少し考えて、散歩して身体を疲れさせることに決めたのです。疲れていればきっと、硬い床でもぐっすり眠れるに違いないのですよ。

出来ることならお布団で寝たいですが、屋根のあるところで寝れるだけで十分だと思わなくてはならないのです。

なにせアタシは家無し子。首からがま口財布下げて、同情するなら金をくれと言わなきゃならないのです。

良くなれば知りませんが、叔母さんが前にそう言つてましたです。

アタシの通うこの学校は、無駄に広い敷地を林と森の間くらいの木々が取り囲んでゐるのです。

昼休みには木陰のベンチで午後の授業に向けて英気を養い、放課後にはやつぱり木陰で参考書を枕に睡眠学習をするのです。じゅ、授業中は睡眠学習はしてないですよ。

第一候補は校舎内ですが、もしもの場合のために寝床にならうな場所を探しながらの散歩です。

校門とは反対側まで歩いてきました。

そこで思い出したのです。

校舎のてつぺんから見ると、この辺りの木々の向こなにやら屋根が見えるらしくとこつ話を。

氣のせいだといふ説と、近所の屋根を見間違えたのだといふ説とあります。

が、地図によるとそこも学校の敷地とひっくり。

これは調査するべきでしょー

別に色々ありすぎて、破れかぶれになつてるわけじゃないですよ。

……たぶん。

初夏だというのにひんやりと涼しい木々の間を突き進みます。

とろそくに見えると評判なチビなアタシですが、実は運動神経は悪くないのです。

狭い塀の上だつてちょちよいと歩けますし、身体だつて十分に柔らかいのです。その身のこなしはまるで猫のよう！ そう自負しているですよ。

決してあだ名が「みー」で、猫のよつだからではあります。

そして進んだ先、そこにはバーネットの秘密の花園のよつな、立派な作りの塀と門があつたのです。

惜しむべきはアタシがそこにに入る鍵を持つていないとここと。ですが隙間から見える東屋あずまやはとっても寝心地が良さそうなのです。

立ち去り難く、アタシは辺りを見回しました。

枝ぶりの立派な巨木が、アタシと寝床を遮る塀の側に立つてあります。

これはアタシにあの木を登り、中に入れと運命の女神サマが言っているに違いないのです。

ええ、そうに違いないです！

なんとか手の届く高さの枝に飛びつき、セレカリするかると木を登っていきます。

猫じゃなくてお猿さんなのよつ？ 失礼な。

猫は木登りも得意なのです。……たまに高いうどんに登つて降りられなくなる子もいますが。アタシは違うですよ！

「おおつ」

登つた先で見えたのは、見事に手入れされたハイソサエティでセレブリティなお庭でした。

思わず感嘆の声が漏れてしまつたです。そのぐらい凄いのです。でもつて、やっぱりお昼寝に最適な東屋なのです！

手入れされたお庭つてことですよ、あの門は開閉可能に違いないです。

こちら側からは開きませんでした。

ですが、きっと向こう側からは簡単に開けられるに違いありません。それが無理でも、学校に戻ることは間違いなく出来るはずです！

そうと決まれば、

……ふああつ。

えつですね、中に入るのは後でも出来ることです。  
アタシの身体は睡眠を欲しているみたいなのですよ、ええ。  
なのでここはひとつ、仮眠を取ることになります。

ぽかぽかお日様の照る木の上。  
寝るには最適の場所です。

## 5、奪われました。

目が覚めました。  
で、目の前に見知らぬ男の人の顔がありました。

……これはどういう状況なのでしょう?

「おはよう」

男の人はにこにこと、思わず見惚れてしまうような笑顔で言いました。

ここはアタシも「おはよう」と返すべきなのでしょうか。  
それとも驚いてみるべきなのでしょうか。

寝起きの頭じやつよく判断できないですが、そのどちらもナシな  
気がしますですよ。

「気持ち良さそうに寝てるから起しきなかつたんだけど、聞いてもいいかな?」

な、何をでしょう。

不穏な空気を感じて後退するのですが、アタシの居る場所  
は木の幹の上。

いくら小柄なアタシとはいえ、これ以上枝先に行くのはマズイの  
です。

「なんでこんなところで寝てるのかな?」

その口調はあくまでも柔らかなそれですが、その目は笑っていました

せんです。

返答によつてはたたつ斬るくらゐの剣番さが見てとれるですよ。

「ねつ」

「ね?」

「ね、眠かつたからつ」

どうにかして逃げられないかと頭をフル回転させながら、とりあえずその視線からは逃れようと、よそを向きます。

大型犬に睨まれた子猫はこんな気分なのかと、ちょっと現実逃避してたりするのは内緒です。

「それ、信じられると思つ?

どう見てもうちをノゾキしてゐようになしか見えなかつたよ?」「

「のそ……き?」

学校と隣家の間には背の高い木々があつて覗くことは無理なハズです。

それこここの近くに隣家は無かつたと思つのですが?

「そう、ノゾキ。

そここの塀から向こう側がうちの敷地。ほら、あの屋根がつづ

おおう、あの謎の屋根のお家の方なのですね。

近所のお家と見違えたわけじゃなかつたのですね。

学校が始まつたら、是非とも話して聞かせてあげなくてはいけませんですよ。

納得がいつて、つい……ええ、本当について。顔を前に向けたら、男の人の顔が目の前にありました。

それも触れそうなほど近くへ。

「で？」

「木の上から覗きをしていた子猫ちゃんは、俺に何か叫び声が入るんじゃないのかな？」

「うわああああん！」

「この人、絶対にSですよ。鬼ですよ、鬼畜ですよ！」

「ごめんなさいと謝りたいのに、言葉にならなくて。自分でも意味不明なことを口走つていると、男の人は思い切り人の悪い笑みを浮かべてくださいやがりました。

「素直に言つてくれないなら、身体に聞こつか？」

「んで、ちょっと。アタシの脣と、男の人の脣が……。」

「何かが爆発して、吹つ飛ぶ音がしましたですよ。」

「目が覚めました。」

「で、目の前にあつた男の人の顔を思い切り睨みつけ、その襟ぐりを掴みました。」

「何してくれやがるんですか！」

乙女の聖域を！ 大切なファーストキスを！」

怒鳴つたのはアタシのせいぢゃないはずです。

目の前の男の人人が不埒な真似をしてくれたせいですよ。

叔母さんは言つてました。

女の子の身体に同意無く触れる野郎は、×××を×××して×<sup>び</sup>  
×してやるべきなんだと。

思わず伏字にしちゃつたのは、それだけ過激な発言だからなのです。アタシは今、あの発言に猛烈に同意してるありますっ！

「……初めてだつたの？」

男の人はびっくりしたような表情で、アタシを見てくれます。

悪いですか！

別に大切に取つておいたわけぢゃなく、相手がいなかつただけですが！

それでもアタシの大切な初物に変わりはないですよ！

むしろアタシが悪いことをしてる氣すらしてくる表情ですが、これは心を鬼にしなくてはいけないのですよ。

こういう場合、女のほうから引いては駄目なのだと叔母さんは言つてましたです。

びしつと、毅然と！ 男のほうから謝罪を言わせなくてはならぬのです！

……ならないのです。

ならないの……です。が。

……あう。

「の、ノーカウントにする。犬にでも噛まれたと思って忘れるから。  
だからその……」

遠いお空の上の叔母さん。

アタシにはびしつと、毅然とした対応は無理でしたです。

「ごめんね。

でも、犬に噛まれただなんて傷付くな」

「あ、えっと、その。ごめ……」

心底傷付いたように聞こえるその言葉に思わず謝りかけ、はたと  
気付きましたです。

なぜに、どうして！ アタシが謝りうとしてるのかと！

「だからね、ファーストキスの謝罪はきちんととするから。  
それを受けてくれないかな？」

「そ、それは……」

「駄目？」

負けたですよ。

なんか、ファーストキス以外にも色々と大切なものを奪われた気が  
がしますですよ。

力なく頷いたアタシは、頭の中で精一杯巨大な白旗を振つたので  
す。

叔母さん。

アタシはケガレテしまいましたですよ。

## 6、捕獲されました。

そのまま勢いで、誘導尋問の如く、アタシは個人情報から身の上話まで。

ピンからキリまで話すハメになつたですよ。  
すると男の人は少し考えるよつに首を傾げたかと思つと、「じゃあ、うちに来ない?」と、名案とばかりに言つて下さりやがりました。

「こんな不得体の知れない不届き者の説いだというのにですよ、思わず頷きそうになつてしまつたですよ。

脳裏に柔らかい寝床と、温かい食事が浮んだからではないと。アタシは声を大にして主張いたします!

「NO」と言おうと、決意を胸に開いたアタシの口からは、なぜかアタシもびっくりな言葉が飛び出しました。

「…………いいの?」

アタシのお口つーにゃんといふことを!

男の甘い言葉には気をつけなさこと、叔母さんが常々言つてたじやないですか!

一度口から飛び出た言葉は戻すことが出来ないです。

冗談だと返つてくるのが半分、いいよと返つてくるのが半分。そんな期待で心の天秤がゆらゆら動くです。

「いいよ。

文句言つのがいるかも知れないけど、俺の決定には逆らわないか

ん？ 文句を言つの、ですか？

「大丈夫、ひとり暮らしじゃないから」

アタシの心の疑問が通じたかのように、その人は笑顔で言います。  
「どうか、ソレを先に言えってんですよ。  
家族と同居しているなら、素直に頷けたと言つのに！」

「それに俺、女には困つてないし。胸も尻もある後腐れの無い友達  
がいるし」

そのトモダチには妙なニュアンスがありましたですよ！  
「でもって、さり気なくアタシが乳も尻もないちんくしゃだと貶  
しましたですよね！」

「ねえ、みー。  
いい猫でいられるなら、次のアパートが決まるまでうちにいて  
あげる」

まるで猫を呼ぶかのようにアタシの名前を呼び、猫の喉を撫でて  
いるかのような手つきでアタシの頸の下を撫でます。  
やつぱり不穏な？ イイコ？ です。

それでも魅力的すぎる誘いなのです。

「俺の謝罪、受けてくれるつて言つたよね？」

返事は？

顔を背けられないように固定され、再び顔が近づけられます。

わつあよりは遠いけど、息がかかるくらいには十分近い距離。  
アタシを見るその田の中に、アタシが映つこんでます。

「と」

「と？」

「泊めてつてアタシからお願いしたんじやないんだからねつ

素直にお願いするのが癪だつたつてのもあります。

だけどそれ以上に、ものすゞぐ、納得がいかない点が多くあるで

すよ！

だからそんな物言いになつたのです。

が、せつやつアタシの返事はお気にならなかつたよつなのですよ。

「まあ、今はそれで勘弁してあげる」

にやり。そつ擬音をつけたくなるよつな笑みを浮かべやがつたの  
です。

でもつて、ちゅつ。と音を立て、アタシの鼻のてつぺんにキスし  
やがつたのですよ！

一度で飽き足りず、一度も！

乙女に同意を得ず、キスをするなんて！

「こゝは怒つて正しいのです。

責められるべきは、思わず手が出たアタシではなくこの不屈き者。  
決してアタシは悪くないのです！

「家に着いたら真っ先にお仕置きだね、みー」

ふぎやーつ！

数秒前のアタシ、怨むですよーつ！

## 7、グルーミングされました。

思い出したら泣けてきたですよ。

半日足らずの間でしかないはずなのですが、不幸を幕の内弁当にしたかのような豪華さですよ。

「ああ、やっぱりサイズが合わないわ」

更に追加するなら、道中あの不埒な不届き者に?」「主人様?と呼ぶように強要されたですよ。

というか、名前を尋ねたら教えてくれなかつたのです。だから何と呼べばいいかという質問に「ご主人様?」と半疑問系で返ってきたに過ぎないのですが。

「でもこの手のデザインはだぼつとしても可愛いから、見苦しいってことはないわ」

そう言つてアタシの服を直してくれたのは、いま着ている淡いピンク色した裾に小花を散らしたデザインのワンピースの持ち主であるヒト。

丸顔で、たれ目。でもつて小柄で少しほつちやり体系でと、とつとこ走る愛玩ネズミに雰囲気がそつくりなお方なのです。驚くことに愛称はハム子さんだそうです。

「娘でもいればサイズのあう物があつたかも知れないけど、うちは息子ばかりだったから」

「いえ、服を貸していただけただけで十分です」

にへらと笑つて御礼を言つと、がぱりと、感極まつた様子で抱き

つかれましたです。

どうやら、ハム子さんの中でアタシは見事薄幸少女として認識されたようです。

玄関で出会ったおにーさんに説明したのと違い、ハム子さんはきちんと説明されたのですよ。あの俺様ご主人様。

アタシのアパートが火事にあい追い出されたこととか。

実質的な一人暮らしで、夏休みを過ごすことになつてた叔母さんに急な仕事が入つたこととか。

そのための認識なのです。

一応は否定しようと思ったのですが……否定できる要素が見つからなかつたのですよ。

だつて更に、俺様でサドに違いないヒトに捕獲されてしまったのですし。

「やつぱり女の子はいいわあ。

若様から好きなように注文していいって言われてるの。腕がなるわ

よー。…………ハム子さんの言葉は、聞こえないですよ聞こえないです。

（）はアタシの立ち位置を再認識して、心を平常に保つです。

おおう、アタシの不幸を振り返ってたら鬼ババへの怒りも再燃してきましたよ。

許すまじ、なのです。

「フリルとかレースとか、物心ついた頃には拒否してくれちゃったから。

アリスの「プロンザレスとか手作りしたかったのに、酷いわよね  
え」

ねー、と同意を求めるよりも非常に困るのですが。  
じけらかといえど、アタシはフリフリひらひらとこつたのは苦手  
なのですよ。

身長と童顔とで、ただでさえ酷い時には小学生に間違えられるの  
です。つるべたなお子様体系のせこじょなこと、アタシは主張いた  
しますですよ。ええ！

「だからとっても嬉しいの」

ハム子さんはそういうふふふと笑うと、ビニからともなく危険なブツ  
を取り出しました。

逃げたくなったのは、相定しません。  
というか、じけりしてそんなものを持っておられるのですか！

「こんな時のために用意しておいてよかつたわあ」

こんな時つて、どんな時なのですか！

ハム子さんの手には、パステルピンクのふわふわしたブツが握ら  
れてます。

それ以外にも、ふわふわしてたりひらひらしてたりするブツが…  
⋮。

めまいがしましたですよ。

倒れたら田が覚めた時の惨状が思い浮かぶので、頑張るですが。

「ワンピースたけじゅ寂しいものねー」

いいえつ、むじひシンプルなワンピースが素敵だと思つですよー。  
思わず後退りましたが、その間はあつとこつ間に詰められました。  
で、ブツがアタシの頭にあてられましたですよー！

「うーん、淡い色よりもしつかりした色のまつが似合つみたい」

そんな眩きと共に、別のブツがあてられた気配がしましたです。  
視界の端っこでジビエなピンクが揺れてるので間違いないはず  
です。

それからハム子さんが満足いくまで……恐ろしく長い体感時間を  
過ごしましたです。

とりあえず満足したらしいハム子さんに見せてもうつた鏡の中に  
いたアタシは、あのシンプルなワンピースはドコ行つたっ！？と言  
いたくなる出来でだつたのです。

頭のてっぺんから、足の先まで。ピンクとレースのオンパレード。

悪夢ですよ、叔母さん。

## 8、脅迫されました。

「若様、お嬢様をお連れいたしました」

強制連行のような心持ちで連れていかれた先で、難しい顔したおにーさんに睨まれましたです。

なんでしょうか、その珍獸でも見るかのような視線は。

身長も胸もちんちくりんかも知れないと、アタシは立派なレディなのですよ！

珍獸ではないのです！

格好は珍獸一歩手前だと自覚しておりますですが！

「わたしの手持ちだけでコードィネートしたので、お嬢様には不似合いかも知れませんが。

いかがでしょうか、若様」

一触即発的に思わず睨みあつてしまつたアタシとおにーさんを無視して、ハム子さんは続けます。

小柄だつていうのに、胆は座つてゐるのですね。ハム子さんは。

これはアタシも見習わなくては。

「うん、制服姿よりは似合つてゐるね。あれは馬子にも衣装だつたし。これでサイズは把握できたと思つから、一揃い揃えておいてくれないか。説明した通りだから、部屋から持ち出した私物を使うにも抵抗があるだろうしね」

「腕がなりますわ。

きっと若様の満足のいく出来になりますよ、お嬢様はとても愛らしいかたですから

ハム子さんとその人は意味深に笑いあつたかと思つて、アタシの洋服の手配と夕飯の仕度があると、ハム子さんは退出してしまったのです。

残されたのは、不協和音を奏でる三人なのです。  
おつそろしいですよ。

「乾、それじゃあさつき話した通りに頼むね。  
現場には一度くらいはいく必要があるだらうけど、それ以外はお前と鷺沼に任せる。彼女とはレオを通じて許可を得てある」「かしこまりました」

それをわかっているのかいないのか。  
にっこり笑顔でおにーさんに退室を促すと、おにーさんは不機嫌  
そうな顔をのままに頭をさげた。  
んで、顔をあげぐるりと踵を返す際に……アタシ睨まれましたで  
すよ！

魂消るかと思つたですよ！  
思わず後退つてしまつたですよ！

「みー、じつちにおいで」

キイ、ばたん。と、大きな扉には不釣合いな軽い音を立て扉が閉  
まつたかと思うと、その声はアタシにかかりましたです。  
ゆっくり恐る恐る振り返ると、そこには笑みを携えたその人が。

……目が、笑つてないですよ？ 見事な笑顔なのに？

だ、誰か、助けてくださいです。

いたいけな少女を苛めようとする悪い大人がいるですよー。

「いいかな、みー。

ここにいる間は俺の言葉は絶対、俺の言葉に逆らうことは許されないんだよ」

なかなか動こうとしないアタシに痺れを切らしたのか、おもむろに立ち上るとアタシとの距離を詰めたです。

その無駄に長い脚で数歩。たったそれだけでアタシを見下ろす位置に来ると、むんずとアタシの腰に手を回して引き寄せてくれやがりましたです。

「良い猫ねこでいるって約束できるなら、火事の件とか、君の叔母さんに黙つてあげる。

だけどそれを守れないなら、保護者に言わなきゃならないね」「お、脅す気

「真っ当な取り引きのつもりなんだけどな。

みーは住む家を無くして困つてる。そんなみーを泊めてあげる。ギブアンドテイクだよね?」

んんつ?

アタシした不埒な事に対する謝罪はどうにこぎやがりました?  
というか、どの辺がギブアンドテイクなのか理解出来ないので  
が。

「だからここにいる間の決まり」と。ここにいる間は俺のいつ」と  
を聞く。

「ね、簡単だろ?」

確かに簡単かも知れないですけど、腑に落ちないことだらけですつー

「それから俺のことは、『主人様。OK?』

『にもかしい』もOKな訳、あるわけないじゃないですか！」

だけど伯母さんに『言いつべと齎され』てはアタシには逆ひつとも出

来ず。

渋々と頷くしか出来なかつたのです。

「いいんだ、みー。

だけどさつしき俺の『言いつ』とを素直にきかなかつた分のお仕置きを

しなきやだね」

.....。

はう。頭の中が真っ白になつてたですよ。

お仕置きつて！

『冗談じやないですよ。

そもそも何様ですか！

.....。『主人様でしたですね。はい。

## 9、お仕置きされました。

抱き上げられて、移動して。

それからストンと降ろされた先は、なぜか、お、そ、……。  
ええい！ これ以上恥らつてなんていられないですよ。こん畜生

めが！

ご主人様の膝の上でしたよ。

それが、どうしたですか！

「みー、随分不遜なこと考えてない？」

……………あ、氣のせいですよー。

というか、どうしてアタシの考へてることがわかつたですか！

「顔に全部出てるから。

ところで、クッキーとプリンならどっちがいい？」

はう。顔に出てましたですか。

そういうえば、よく顔に出る子だと昔は言われたですね。

お母さんには、さすがアタシを産んだだけのことはあってまるつ  
とお見通しだったです。

懐かしいですね。

……………視線が！ ご主人様の視線が！

さつさと答えやがれと無言のプレッシャーをかけてくれやがって  
ます！

ええつと、クッキーとプリンですか。ふむ。

あのサクッとした歯ごたえもアタシは好きです。チヨロチップだつたり、バターたつぱりだつたり、ナツツが混ぜてあつたり乗つたり、ジャムや飴が乗つてたりするのも好きです。

が、しかしです！

ミルクたつぱりのなめらかプリンには敵うはずがないのです！

ほろ苦いカラメルソースと、ミルクと卵の絶妙なタッグのコンビンラスト。これはもう、最強です。ええ！

焼きプリンの表面の焦げたところも素晴らしいですし、ミルクプリンのあの口の中で広がるミルクの風味も棄て難いです。

…………おおっ。想像しただけでよだれが。

「聞くまでもなさそうだけビ、答えは出た？」  
「プリンで！」

ぎゅっと手を握り、自由を宣言するかのように答えたアタシ。「主人様は笑顔でスプーンを差し出してくださいやがりましたです。そのスプーンの上には、アタシを魅了して止まない黄金色の柔肌が。

一つの間に一つ！

「ほひ、みー。口を開けて」

といつかですね、エーハーハーハーハーになつてゐるのですか！

さつきはお仕置きがどつのかトイヒトいたですよね。  
お膝の上でアーン。

これはお仕置きといつよりも、バカツプルつて感じではあります  
んか！

確かに羞恥で悶えられますけども！  
アタシの精神にはひとつもないダメージを与えてはいますけれど  
も！

「うーん、仕方ないなあ」

一向に口をあけようとしないアタシに、『主人様はやっと諦めた  
みたいです。

魅惑の物体を自分の口の中に放り込みましたです。

嗚呼、麗しのプリンちゃん……。

アタシが食べてあげられなくてゴメンなさいです。

恨みがましい目で見てしまったのは、きっと仕方のないことだっ  
たんです。

プリンちゃんだって、この俺様鬼畜不埒男に食べられるより、き  
ゅーとでぷりちいなアタシに食べられたいはずです。

あうー。プリンちゃんー。

「うふ、美味しい」

そしてにやりとアタシに視線が。

なにやら企むような視線ではありますが、そんなことよりも魅惑  
のプリンちゃんが目の前にあるといつに食べられないことのほう  
が大問題なのですよ！  
ショックなのですよー！

再びパソコンちゃんがスプーンにカクフカされ、アタシの口で  
はなく俺様（中略）男の口に。

「一。プリンちゃん……。

「……んぐっ……」

は、はにゃがっ！ アタシの可愛らしい鼻が摘まれたです！  
アタシの可愛い鼻が低くなつたらどうしてくれるんですか。  
つていうか、何してくだぞ。

……。

……。

ん、あやああああああああああああ！

く、口の中に甘くて濃厚なプリンちゃんと一緒にっ。  
うにゅんっ！ むしろ、おいらおらわこのけそこのけつて！  
アタシの口にプリンちゃんを押し付けようつに絡めてやがりや  
がつて！

ほふん。

本日二度目の、頭の中の何かが爆発して吹っ飛ぶ音がしましたで  
すよ。

叔母さん、アタシの頭はもう限界れす。もうダメれす。

……。  
ぬう。

## 10、色々とされたました。

頭が完全に目覚めたのは朝<sup>じ</sup>はんを食べている時でした。  
ええ、朝<sup>じ</sup>はんなのです。晩<sup>ばん</sup>ではないのです。

つまりですね、×××があつた後ですね、色々あつたせいなのが  
ぐつすり眠ってしまったみたいにして。  
気が付いたら朝でした。といつ訳なのですよ。

伏字にしたのは……思い出したくないからなのです。  
微妙な乙女心を察してください。

唇<sup>ひ</sup>への、ファーストキスに続いてセカンドキスまで！ しかも×  
××！

もうお嫁に行けない。そんな気分なのですよ。

それですね、一緒に朝食をとこうガママを叶えるためにアタ  
シは起こされまして。

普段は寝起きが悪くないのですが、疲れのせいかなか起きな  
いアタシですね、ハム子さん<sup>ハムコ</sup>さんが甲斐甲斐しく会話してくださいま  
してですね。

つまり何が言いたいのかと言いますとですね、小さこ子のよつこ  
元<sup>ヒツコ</sup>を洗われ着替えさせられたのですよー。

恥ずかしいですよ！

困辱ですよ！

顔を洗われたり着替えさせられたことがではなく、昨日以上にふ  
りふりのびらつぴらの格好をさせられたのがですよー！

しかも昨日と違つて、サイズは全部アタシにぴったり。  
頭の天辺から足の爪先まで、見事にコードィネートをせられてる  
のです！ コードィネートは「一」とこいつ、見本の如く！

…………「ほん。

兎にも角にも、この屈辱にアタシは耐えられませんです！

「みー、美味しい？」  
「はひ、おいひいれす」

朝のこと思い出しながら、とさりと口の中で蕩ける極上のプリン  
に舌鼓を打つていたアタシは、レディとしてはあり得ないことに、  
口の中に食べ物が入つている状態で喋つてしまつたです。

仕方が無いのです。プリンは正義なのです！

幸い、ハム子さんからお叱りの視線を頂いただけで済んだです。

…………もう、しないですよ。

うちの母はアタシに最低限の食事のマナーを叩き込んでくれたの  
です。

その理由というのがですね、美味しくご飯を食べるためには目の前  
で不快な所作をされたくない、というなんとも自分本位なものであ  
つたりするのですが。

そんな訳で、口の中に入つている時に喋つたなんて……  
……あう、母の鬼のような形相が脳裏に浮んだです。

「それは良かった」

すると聖人君子もかくやといつ笑みで、微笑みやがりましたです。  
変態のくせに。俺様のくせに。

心の中だけでぶつぶつと呟いて、叔母さん仕込みの笑顔でそれは  
まるっと隠すです。

色の白いのは七難隠すそいつですが、乙女の笑顔は百難隠すそいつで  
す。

百も災難があつて笑顔を浮かべられるのはかなりマゾなひとだけ  
だと思つのですが、考えたら負けと頭の隅に迫いやるです。

「ああ、そうだ。

みーのアパートの立会いには、みーが直接立ち会わなくて済む  
よつにこちりで手を打つておくから。みーも大家には会いたくない  
だろつし」

確かに、あの鬼ババとは顔をあわせたくないです。

普段ならまだマシですが、色々と打ちひしがれてる今はとてもそ  
んな元気がないです。

だから素直に首を縦に振ります。

「立会いに誰もいないわけにはいかないから、代理としてうちお抱  
えの弁護士を行かせるよ。

必要ならアレの判断でみーに連絡を取るよつに言つてあるけど、  
アレはまだ若いが優秀な部類に入るからね。

心配はいらないよ」

「まあ、鷺沼のぼつちやんにお嬢様のことをお願いなさるんですね。  
それなら安心ですわ」

誰に頼むのか、思い当たる人物がいたのかハム子さんは名案とば  
かりに手を叩いて満足げに頷いてた。

鷺沼さん。たきぬま。たわ.....。

……うん、覚えましたです。鳥さんですね。

どんな経緯があるにせよ、アタシのことをお願いするのだから名前くらいは記憶しておかなきゃです。

きっと会う機会もあるでしょうし、その時にはきちんとお礼を言わねばです。

「そういう訳だから、みーは家で良い猫にしてね。

帰つて来た時もその格好だと嬉しいな」

昨日のようなことがあっても困るので、とりあえず大人しく領きました。

さり気なく着替える気でいたのが見抜かれて阻止されましたが、これも我慢するしかないですね。  
触りぬ神に祟りなし。というやつです。

まさかアルゴールの入った叔母さん以外に当てはまるヒトがいるとは思わなかつたですよ。

## 11、真相が判明しました。

アタシが拾われた翌日以降、「ご主人様は外出する」ともなく家でなにやら机に向かつて仕事をされてました。

三階にあるご主人様の仕事部屋にはバルコニーに続く大きな窓がありまして、そこにアタシ専用の椅子が置かれてそこがアタシの定位となつてます。

のんびりまつたり。

家の中でくつろぐ飼い猫つてこんな気分なのかと、飼い猫ライフを満喫中です。

……まあ、アタシのちょっととしたミスで「ご主人様と一緒に寝る」とになつたりとかですね、色々と不満はあるんです。

あるんですけど、なんか色々と諦めたというか慣れたというか。そんな日々が続いているですよ。

夜抱き枕にされると、ハム子さんにふりつふりのぴらつぴらな服を着せられることと、アレなティータイムを除けば……快適です。

犬さんのアレな視線も気にしないことに決めましたですし。

「みー、ちょっとこっちにおいで」

半分寝ていたアタシは「ご主人様の声に立ち上がると、応接スペースのソファで手招きしてやがります。しかも何時の間にやら、来客がいやがるですよ。

とてとてと歩きまして、『ご主人様の前で立ち止まって首を傾げます。

なあに？

言つのも面倒なので、仕草で訊ねるですよ。

「鷺沼がアパートの報告書を持ってきたんだ。  
みーも知りたいだろ？」「

それだけを通じたのか、ご主人様は笑顔でそつ尋ねてきましたで  
す。

それは当然知りですよ！  
アタシが家なしになつた原因なのですから！

それはさておき、鷺沼さん？

ええつと、どちらさまでした…………おおう、思い出したですよ。  
ご主人様お抱えで、ハム子さんがぼつちやまとべた褒めしていた、  
弁護士の鳥さんですね。

腕を引かれるままティータイムの時のようにご主人様のお膝の上  
に乗つかりまして、アタシのアパートのごたごたを片付けてくれた  
彼を見やります。

イメージとしましてはですね、生真面目ーを形にしたようなヒト  
です。

ですが、べつたり固定された七三分けと、時代遅れのださ黒縁眼  
鏡。なぜかダブルの金ボタンスースで、胸元では紐ネクタイが揺れ  
てるです。

…………アタシのふりふりぴらぴらもイタイと思いますが、この  
ヒトも相当ですよ！

「お嬢様、この度アパートの事後処理を担当致しました鷺沼と申し

ます。

格好は……気にしないでいただけだと。若の元を訪問すると祖母に知られて、このよつとさせられまして」

同士ですか！

イタイとか思つちやつて、申し訳ないですよ。

言われてみれば、スーツのサイズがあつてない気がしますね。だぼつとしてるし、丈も足りてないです。

…………うん。

「みー、あまりじろじろ見ない」

まじまじと観察してしまつたら、『主人様に怒られましたです。そうですよね。アタシだつてじろじろ見られたら気分良くないです』

しゅんとなつたアタシの頭を『主人様は撫で、それから鳥さんに話を促しましたです。

鳥さんはそれを受け、取り出した紙の束を捲りながら読み上げます。

「出火の原因は、老朽化した外灯の配線を放置したことによるものでした。

作つた当時の大工に確認を取れなかつたのでどうしてそくなつているのかわからないのですが、外灯の配線がなぜか各部屋の台所部分を通つていたんですね。外に露出している部分ほどの劣化はみられませんでしたが、許可をとつて壁を剥がさせてもらつた部屋でもいつ出火してもおかしくないような劣化が見られましたから間違いないでしょ。

消防の見解も壁の中の配線からの出火でした。

また、別の住人の話ですが、外灯の配線の老朽化に気付いた住人が危ないから直してくれと大家にお願いしたところ、けんもほろろにされたと。外に露出していた場所はビニールテープを巻くだけに済ませ、これ以上を求めるなら自分で業者に頼めとも

あー、そういえば、女優を目指すおねーさんがそんなことを言われたと言つて怒っていた記憶があるですよ。

不規則な生活をしてるおねーさんだったので、ほとんど顔をあわせなかつたのですが。

「その外灯は共有部分だよね？」

「はい。 ですのでお嬢様にこの度の出火の落ち度はありません。むしろ慰謝料を請求できるかと」

ほつとしましたですよ。

慰謝料うんぬんはとりあえずおいておくとしてです、出火の原因がアタシじゃなくてよかったです。

これで叔母さんに心配をかけなくて済むですよ。

思わずうつるつときちやつたのを隠すために、手近にあつたご主人様に抱きつくです。

夜に抱き枕にされてるとですね、抱きつづのが今更つて気分なんですよ。

「みー、どうしたい？」

望むなら、火災の慰謝料だけじゃなくて数々の暴言に対する慰謝料ももぎ取つてあげるよ？」

「……それはいらない。

叔母さんに迷惑をかけないですむ、新しい部屋さえなんとかなれば

鼻声だつた直覚はあるです。

でも仕方ないのです、叔母さんに迷惑をかけてしまつんじやない  
かと……ずっと気が気じゃなかつたんです。

飼いネコライフをただ満喫してたわけじゃないんです。

「それなら簡単に手配できる。

鷺沼、学校の手続きは任せたよ」

「かしげまりました」

……………んお?

なにをかしげまりたんですか、島さん?

## 11、真相が判明しました。（後書き）

実際に本文中のよつたな判断を弁護士がするか、謎です。

## 12、決断を迫られました。

「学校まで徒歩〇分、家事の類の心配も一切いらない。  
最高の下宿先だと思わない？」

理解出来ないでいるアタシに、「主人様はそれは楽しそうに言つ  
やがりました。」

魅力的なんでもんじゃなくくらい、魅力はあるですよ。  
お昼寝に最適の場所はあるし、ご飯は美味しいし、ミルクを使つ  
たデザートは最高だし。

まあ、色々と不満はあるんですが。

それよりも魅力のほうが大きいのは確かなのです。

なのですが、

「無理っー！」

叔母さんになんて説明すればよいのか。アタシにはやつぱりな  
ですよ！

なのでアタシは必死に首を横に振ります。

「叔母さんのことを中心してるなり、気にする必要はないよ。  
みーの叔母さん、結婚してロンドンを拠点に生活することになる  
から。俺が保護者代理を引き受けさせてもらうに障害はない」

……はい？

そんな話、聞いたこと無いですよ？

男なんて信用ならない、が口癖の叔母さんなのですよ？

結婚する相手がいるなんて話、聞いたことがないですよ？

「レオのやつ、今まで女に不自由したことがないからって女の口  
説き方もわからなかつたんだよ。笑えるよね。

一曰惚れしてからずっと仕事の関係だけで我慢してたなんて、『冗談みたいな話だよね』

意味がわかんないですよ。

そのレオさんとやらと、アタシの叔母さんがビーツして一緒に話こ  
出していくですか？

「意味がわからないって顔してるね？」

間抜けな顔のみーもかわいい

んをつ！

間抜けとはレディに対しても失敬な！

『主人様はアタシのそんな心に気付いたのかにやりと笑うと、頭  
をぽんぽんと軽く叩いてくれやがりました。

「褒めてるんだよ？」

俺、誰かをかわいいと思つたのなんて、始めてだしね

その？かわいい？は絶対に愛玩動物に対するそれで、間違つても  
人間のレディに対するそれじゃないと、アタシは主張するですよ！<sup>ベット</sup>

「……まあ、どっちでもいいじゃない？  
かわいい事に違はないんだし」

一緒じゃないですよ！

そうやって女心を理解出来ないから、男の人は女性に呆れられるのですよ。

毎日の些細な「アイシテル」が女性の心を掴むのです。イベントの時に特大の「アイシテル」を捧げるだけでは駄目なのですよ！

別にアタシは『主人様に「アイシテル」と言つて欲しいわけじゃないですよ？

コレは叔母さんの主張なのです！

「暫く一緒にいて、俺がみーの嫌がることをすることがあった？ベッドの中でだつて、優しくしただろ？？」

もの凄く卑猥に聞こえますが、単純に抱き枕にされただけの関係ですよ！

つていうか、嫌がることだらけじゃないですか！

お膝の上だつて、出来ることなら遠慮したいのですよ！

「みーに与えられた選択肢はふたつ。

叔母さんと一緒にロンドンに行くか、俺のところに残るか

どっちかだよ？

「一〇一。

学校のお受験英語ですら厳しいアタシに、英語圏で生活しろだなんてそんな無理難題を突きつけられても困るですよ。

その上、ご主人様の言い分を信じるなら新婚さんな叔母さんの家に瘤がくつづいて行くのも気が引けるのです。

でもでもでも、でもなのです。

いくらご飯が美味しいとデザートが絶品でアタシに丑されぬマジ  
クが極上のそれだとしても、このまま主人様のところへ厄介  
になるのはアタシのプライドとか色々なものがですね。

「一、悩むのですよ。

「美衣ちゃん！」

聞きた声がドアを勢いよく開け放たれる音と一緒に聞こえ顔  
を向けると、そこには叔母さんが立っていました。  
両脇にイケメンふたりを引き連れて。

……いえ、片方は犬さんなんですけどね。

### 13、嵐が通り過ぎました。

…………あふう。

なんでなのでしょう、ため息が止きないですよ。

アタシはマイソファで丸くなると、幾度目かわからないため息をついたのです。

アレは強烈でしたのです。破壊力抜群でしたのです。  
今まで一緒に住んでるなんてのは書類上だけのもので、現実には一人暮らしだったから気付かなかつたのです。

体力を「ごそり奪い取られた気分なのですよ。

結論を先に言いますとですね、アタシは敵前逃亡しましたのですよ。

叔母さんと一緒に暮らすなんて勇者なことはアタシには無理だと悟つたのですよ。

叔母さんを捕獲したというレオさんを褒め称えたい気分で一杯なのです。

つまりですね、叔母さんはアルコールが入つてなくとも強烈だつたのです。

アタシには一緒に暮らして、あの過剰な愛をこの身に受けれる勇気がなかつたのです。

叔母さんは部屋に入つてくるなり、「主人様の膝の上で固まるア

タシに僅かに息を呑んだだけで、マシンガンの如く言ひて貰ました。

アタシの愛しの姪になしてくれてるのよ。

その子はアタシが姉さんから預かつての大切な子なのよ。  
悪い虫がつかないよう、男の醜悪さをきつちりと言ひ含めて育てたのに。よりによつてレオの知り合いなんかに！

嗚呼、神様！ アタシが至らないばかりにあの子に苦労をかける事になつてしまつたわ。アタシはどう責任をとればいいのかしら。そもそもそこアソタ、アタシの愛しの姪を傷物にした責任をとりなさい。

本音を言つなら今すぐにも搔つ攫いたいところだけど、子どもには父親が必要だもの。それがどんなに卑劣で救いようのない悪辣な男だとしても！

類が友を呼ぶつてのは本当だつたのね！

とまあ、色々と要約するとこんな感じの内容をほほ一呼吸で言つてくれたですよ。

途中で英語とか、フランス語やドイツ語らしきアタシには理解出来ない言語でも罵りらしき言葉を言つてゐたです。

荒い口調とそれを聞いて微妙な表情を浮かべた犬さんからの推測ですけど、あながち間違つてないと思つですよ。

叔母さんはまるで、猫が背筋を逆立てて威嚇してゐみたいだつたのです。

レオさんとやら何があつたのか聞いてみたい気もしたですが、まさしく「触らぬ神にたたりなし」と判断したアタシは口のよう口を噤むことに決めたです。

レオさんの腕の中に捕らえられ、こちらを 正確には「主人様

をですが 睨んでくる叔母さん。

相も變らずご主人様のお膝の上だつたアタシは「ご主人様をちらりと見上げ、表情ひとつ変えなかつたご主人様に決意しましたです。

「あのね、アタシこのヒトのとこにお世話になるか?」

ファーストなキスもファーストなべらちゅーも奪われたけど、傷物と呼ばれる関係になつてないし。

〔冗談でなく、愛玩動物扱いだし。  
ベット

色々と不満や不安はあるのですよ。

だけど叔母さんとの生活を天秤にかけたら、こっちのほうがマシかなあとか思つた次第なのですよ。はい。

叔母さんはその目に大粒の涙を浮かべるとレオさんに抱きついて、言つてくれました。

あの×××の×××を×××してやりたい。

伏字のところは右から左に、頭の中に残らずに素通りした単語なのです。聞こえてはいたはずなのですが、脳が認識することを拒否したのですよ。

爆弾発言をしてくれた叔母さんをレオさんは抱きかかえると、ご主人様とアタシにホテルに戻る旨を言つて、犬さんを連れて去つていつたのです。

アタシは悟つたのです。

叔母さんは嵐、それもアタシでは到底太刀打ち出来ないほどの大

大台風だと！

「うーうーうー。

叔母さんはスーパーワーマンに違ひはなかつたです。ですがそれが「デキル女」という方向ではなく、恐ろしく迷惑だという事実をアタシの心と頭が認めたくないと拒否してゐるですよ。

「みー、頭の整理がついたらこつちにおいて。レオが持つてきた菓子でお茶にしよう」

アタシを放つておいてくれたご主人様が、頃合いを見計らつたようには声をかけてきました。

菓子という言葉に反応してしまつたのは、アタシが食い汚いからではないと主張します。

頭を使うと、エネルギーを消費するのです。

これはアタシの身体が糖分を要求しているということなのです。

ソファーの上で膝立ちになつたアタシに、ご主人様は笑みを浮かべ、ちょいちょいと手招きします。

「おいで、みー」

それから念を押すようにもう一度呼ばれ、アタシはご主人様のところに向かつたのです。

普段なら渋々と向かうといひますが、軽やかな足取りで。

保護者公認の飼い猫ライフの始まりなのです。

飼い主に媚を売つておくのも悪くないんじやないかと、飼い猫なアタシは考へたのですよ。

### 13、嵐が通り過ぎました。（後書き）

とつあえず、いじいでプロローグ的なものは終り。  
続きの構想はあるので、たぶん、続きます。

猫といータイータイム（前書き）

短編より移行。

たぶん、「13、嵐が通り過ぎました。」後のこと。

## 猫といでタイム

吾輩は猫である、名前はまだない。

おそらく日本で一番有名な猫といえば、夏田漱石のこの猫だと思われます。

それともテレビで話題なアイドル猫でしょうか。駅長猫までいるといつし、活字を読まない人が増えてるって話だし。

どうしてそんなことを考へてるかといふと、一応はネコであるアタシとしましては、ほんのちよっぴし気になるのです。

現実逃避ではないと、念のため申し上げておきます。

信じてはもらえないとわかつてますし、自分でも無理があるなど思ひますが。一応。

「みー、いっしおいで」

「ご主人様の仕事部屋に置かれたふかふかのソファー。そこがアタシの定位置なのですが、呼ばれれば仕方なくご主人様のところにアタシは行くのです。

一宿一飯の恩義というやつです。

……既に一週間は世話になつてゐるだろといつしつゝは不要です。

近くまで来たアタシの不満だら漏れな顔を見て満足そうに素晴らしい笑みを浮かべられたご主人様は、ぽんぽんと自らの膝を叩かれます。

「これはアタシに、ここに乗れと、やつおっしゃりたいので、」  
「アタシに、乗れと、やつおっしゃりたいので、」  
ますね。

丁重に辞退申し上げたいところですが、拒否したなら無理矢理に  
路線変更することが分かってるんで、素直にそれに従います。  
屈辱です。

「猫は寝子から転じたともいつけど、みーは本当に良く寝る。俺が  
呼ばなきやすつと寝ているね」

膝の上に乗せたアタシの頭を撫でながら、ご主人様は愉快そうに  
言われます。

それにアタシはふいとそっぽを向きます。ヒトをからかうような  
このご主人様の視線は嫌いなのです。

だつて、眠いものは仕方ないのです。それをどういふと言われても  
困るのです。

「若様、失礼いたします」

そこにドアをノックする音が響いて、ご主人様の返事の後、いつ  
ものように音もなく男の人人が入ってきます。

スーツではない黒の上下に身を包んだ、綺麗に髪を撫でつけた銀  
縁眼鏡のおにーさんです。確か、乾さんとおっしゃる執事さん……  
いえ、家令さんだそうです。

執事と思つたとたん、考へが筒抜けだったかのように睨まれまし  
た。

恐ろしいです。

きっと超能力か何かお持ちなんですよ。

ご主人様の欲しいものをどこからともなく差し出したり、気配もさせずに移動されてたりしますから。

「本日はダーティーの良い葉が手に入りましたのでそちらと、シリテのフルーツタルト。お嬢様にはご指示通りミルクをお持ちしました」

部屋には立派な応接セットがある（もちろんアタシの寝床となつているソファーとは別！）にもかかわらず、乾さんはそれらを執務机に並べていきます。

あつという間に紙で埋め尽くされていた机には十分なスペースが作られ、そこに並べられます。

これもきっと、超能力のなせる技ですね。

それを感嘆することにして、アタシに向けられたらしい憐れみの視線は無視します。スルーです。

これから行われるだろうお茶の光景は、一週間経つても慣れないくらい、アタシの精神衛生上とてもよろしくないのです。

「さあ、みー。ミルクを飲ませてあげよ！」

にやりと笑つたご主人様は、ミルクの入った平皿をアタシの前に突き出します。

「うう、ミルクは大好きなのです。

なのですが、これはいかがなものかと思つのですー。

羞恥にプライド、恩義におしおき。心の天秤がぐらぐら揺れます。  
せめてお皿を机に置いて欲しいと、上皿で<sup>うわめ</sup>ご主人様を見上げます。  
が、ご主人様はにこやかに微笑まれたまま。

「どうした、みー？」

初日のおしおきが脳裏に浮かびます。  
……も一度アレをやられると思えば、この程度つー。女は度胸、  
なのです！

アタシは意を決してお皿に顔を寄せ、ミルクに舌をのばします。

ぴちゃや、ぴちゃや。

アタシがミルクを舐める音が、やけに耳に障ります。  
顔は真っ赤になつてることでしょうか。

それでも農場から特別に運ばせてているといつミルクはひとつでもおいしいのです。スーパーのパック牛乳とは訳が違うのです。この状況でも味の違いがわかるほどに。

「一、二、三、四、五。

色々なものと格闘しながら、それでもこの時間を一分一秒でも短

くしようと、ミルクと格闘します。

最後のひと舐めをし、文句あるかとばかりに「主人様を睨みつけます。

「……こんなに顔を汚して」

仕方ない子だ。

「主人様はそう言われたかと思うと、何をとち狂ったのか、アタシの唇を！ 乙女の汚れなき神聖な場所を！ その無駄に形のよい唇で吸いやがったのです！」

思わず後ろに下がつたせいで、後転するような格好で椅子から落ちたのは、今は問題にするところじゃありません！ それよりも問題にするところがあるのでー！

「みー、裾がめぐれて脚が丸見えだよ。  
もしかして誘つてる？」

「誰が誘うかー！ この変態ー！」

アタシの空のように広い心でも、無理矢理ファーストキスを奪われた恨みは晴れることはないのです。更にこんな形でキスまでされれば！

怒鳴つて、寝床であるソファーアーに向かいいます。

くつくつと、『ご主人様の笑い声が聞こえます。

振り返る気力すらありません。にやにやと、変態な笑みを浮かべているに違いないんですから！

「みー、ショリテのフルーツタルトは？」

……む、無視です、無視！

食べたいなどと考へてはいけないのです！

「乾、みーの分は夕食の『トザート』に出してあげて」

「かしこまりまして」

さつきちらりと見た美味しそうなフルーツタルトを思い浮かべながら、アタシは眠りにつくのです。

聞こえたご主人様と乾さんの会話が、ほんのちょっと嬉しかったのは……内緒です。

猫とベッド（前書き）

短編より移行。

「10、色々とされました。」と「11、真相が判明しました。  
の間の出来事。

## 猫とベッド

昼間たくさん寝ても、夜になれば自然と眠氣は襲つてくるものなのです。

あぐびをしつつ、寝支度を終えベッドにと向かいます。

「遅かつたね、みー」

そこにはなぜか、既にご主人様がいました。

思わず立ちどまり、理由が理解出来なくて首を傾げます。

そこはアタシのベッドなはずです。

「みー」

自分の隣をぽんぽんと叩きながら、『ご主人様は笑顔で再度アタシを呼びます。

ああ、あの笑顔をする時は逆らわるのが一番なのです。  
恐る恐るベッドに近付いて乗つかって、ご主人様を見つめます。

「なんで俺がここにいるか分かつてないって顔をしてるね。  
昼間自分が何をしたか、思い出してみたらどう?」

……昼間、ですか？

昼間は確かに、『主人様が外出されたのでお屋敷の中を探検したのです。

無駄に立派なお屋敷の中は、やっぱり無駄に豪華だったのです。

で、その途中で熊さんにありました。

大きな身体におひげのお顔、つぶらな瞳はお歌の中の熊さんそのものだつたのです！

あるう日い、森のお中あ、熊さんにい、でああつた。……出合つたのはお屋敷の中でしたが。

とにかく、アタシは熊さんにぐつついて厨房について、そこでアイスをいただいたのです。甘くつておいしかったのです。ほっぺた落ちるかと思いました。

そんなアタシに、内緒だよともうひとつアイスをくださいました、探検のお供にアイスが増えたのです。

「みー、思い出した？」

そこまで思い出したといひで『主人様から声がかかりました。が、無視です。

アタシの小さな脳みそでは一度にたくさんのこととを処理できないのですよ。

ええっと、アイスをお供に探検を再開したのですよ。

それでとっても素敵なベッドを発見しました、そこで昼寝をしてしまったのです。

当然起きた時にはアイスは姿を消しておりまして、ふにゃふにゃになつたコーンだけがアタシの手元にあつたのです。

ミステリーですね。

うんうんと頷くアタシとは対象的に、『主人様はどこかイライラした様子です。

ダメですよ、カルシウム不足は身体と心に悪いのです。

「シーツだけでなく、マットレスまでクリーニングする必要があるんだって」

……ナンノコトナリショウ。

「あのベッドはサイズが特注な上に俺の身体に硬さも合わせてあるんだよね。

新調するよりはクリーニングの方が早いし安くつくところになつたんだけど……」

嫌な予感がして、ベッドの上で後退ります。ですがすぐにつかまれ、それも阻まれました。

『主人様、あなたは人でなしですか。

「なんないたいけなアタシをこじめるだなんて。

「一週間」

はい？

「ベッドが使えるようになるまでにかかる期間。  
その間俺はこのベッドで休むことにするね」

もつと意味がわからないです！

といふか、手を離してください！」

「暴れるな、みー」

それは無理な相談ですっ！

だけど抵抗は無駄で、アタシはこの主人様の腕の中につっぱり取ります。

のしかかるような格好はこの主事様の体温を直に感じられて、トクトクと伝わる心音が眠りを誘うのです。

……。

はつ。つこいつひとじりしまいました。

アタシとしたことが！

「睡眠はしつかりしたものを短くというのが、うちの祖父の格言でね」

はあ、「ご主人様のお祖父様の格言ですか。確かに素敵な眠りは最高なのです。それはわかります。

ですがですね、それがアタシと一緒に寝ることにつながるのか理解出来ないですよ！」

「だから合わないベッドで休む気にはなれない。客用で一番俺に合うのがこのベッドなんだよね」

「だったらアタシが別のところで休むですよー。アタシはどうでも寝れるのが特技なんです！」

「とはいって普段使っているベッドには到底敵わない。そこで思つたのが、小動物による癒し効果。

そういう訳だから、俺のベッドを使い物にならなくした罰として大人しく抱き枕になつて」

んなつ！ なんと横暴な！

アタシは小動物は小動物でも、大人しく主人に従う？犬？ではな

く？猫？なのです！

それを主張するために、ご主人様の顔を睨みつけたら  
てて寝てやがります。

アタシもびっくりな寝つきの良さですよ。

「……今日だけ、だから……」

ベッドをダメにしたのはアタシなのです。なので今日は引いてあげるのです。

決して、ご主人様の温もりが心地よいとか、そんな理由じやないのですとも！　ええ！

ご主人様の肩に頭を預ける体勢で、そのままアタシは眠りにつきます。

木々に囲まれたこのお屋敷は夏の夜でも涼しくて、くつづいて寝ても暑苦しくないのが救いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5269s/>

---

ご主人様と猫。

2011年8月8日16時15分発行